

煙草の値上げ

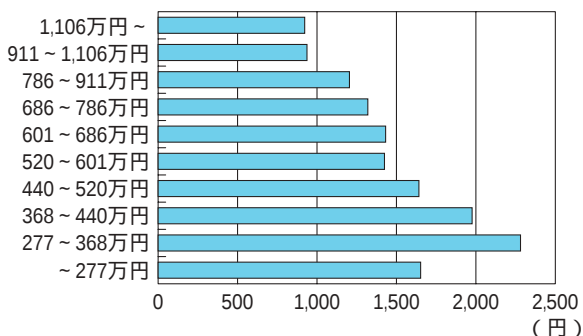
前第三経営経済研究部長 田町 典子

私は煙草を嗜んだことがない。それどころか大変迷惑しているクチである。最近は分煙が進んで会議室も執務室も禁煙になったので本当に有難いが、歩き煙草にはいまだに悩まされる。通勤路では狭い歩道で追い抜くこともできず、前を歩く人の煙草の煙に包まれながら歩かされる。追い抜くためにはその人の横をすり抜けてダッシュしなければならないが、最近の喫煙者は火のついた煙草を外向きに持って歩く。ひどいのになるとその手を時々外側に突き出すようにして味わう。刃物ならあんなふうに振り回せばそれなりに取り締まってくれるのだろうが、煙草なら火がついているのに文句を言う人もいない。横をすり抜けて走るのも命がけ（？）である。通勤路が上り坂なのと体重が増えたのとで走るのが辛い、という事情も手伝って、「煙草はどれほど値上げして頂いても結構。税収も増えるし、それで他が減税されればなお結構、喫煙者が減れば万万歳」との主張にも力が入ってしまう。

ところが、経済統計をひもといてみれば、煙草に高率の税金をかけるのはいかなものか、という結論になるのだから困る。総務省統計局の家計調査年報によれば、貧しい世帯ほど煙草の消費額が大きいのだ（図1参照）。それも消費全体に占

める割合ではなくて実額で大きいのだから、家計への負担で考えればこの傾向は一層強いことになる。このように所得が低いほど多く消費するもの（下級財という）に高率の課税をすることは、「消費財への課税は奢侈品へは高率、生活必需品へは低率とすべき」という課税の常識に反している。煙草が下級財である事実は一貫したものであり、専門家にはよく知られた事実でもある。従って煙草値上げの話が出てくると、下級財への課税強化だからねえ、という声もつぶやかれはする。それでも近年は健康問題や社会的影響が重視されるようになり、煙草消費は抑制される方向に進んでいる。有難いことである。

図1 たばこ消費額（月平均、1世帯当たり、勤労者世帯、年間収入十分位階級別、平成13年）



（データ）総務省統計局「平成13年家計調査年報」